

編集後記

今年は明治維新150年という事でいろいろなイベントが開催されました。私にとっては、1月7日に宝山ホールで開催された大河ドラマ「西郷どん」第1回放映パブリックビューイングで見た「気張れ！チェスト！」が始まりでした。当会全体では、4月19日に開催された第13回臨時代議員会で上ノ町仁先生が第15代会長に選出され、6月25日の定時代議員会終了後から新たな執行部が発足し、さまざまな活動を行っているのが一番の出来事でしょうか。

さて、誌上ギャラリーは、馬場國昭先生による昭和35年に始まった鹿児島の晩秋の風物詩の一つ「仙巖園の菊祭り」、菊花三重塔の奥に見える雄大な桜島。雲が大隅半島に流れている風景は、もう冬がすぐ近くに来ていることを感じさせます。

本号は、今年の総目次があるように、1年の総括がメインテーマです。論説と話題は、年末挨拶を各医会会長と事務局から投稿いただきました。お忙しい中、投稿くださった皆さんに感謝いたします。各医会会長の挨拶で気になるのが、泌尿器科、耳鼻咽喉科、小児科の3医会で会員高齢化による休日と夜間の当番医制度の維持が困難になりつつある現状です。実は皮膚科医会も同様であり、医師会全体として対応を考えねばならぬ課題となりそうです。

医師会事務局からは、東 耕治事務局長が今年の出来事と医師会活動の総括を、附属施設（医師会病院、臨床検査センター、夜間急病センター）の責任者からは、それぞれの施設の詳細な報告がありました。今年の医師会病院は、インフルエンザ流行による入院患者数の激増からスタートし、キャッシュフローでは黒字化できていますが、減価償却を入れるとまだ道半ば、「医師会病院あり方委員会」での検討結果が待たれます。一方の検査センターは、3S（精度・スピード・サービス）の向上に努め、検体数も売り上げも順調に増えており、

2年目のジंकスはなさそうです。

くすり一口メモは、花粉症の免疫療法に使う舌下液に関する情報提供です。従来のアレルギー疾患に対する減感作療法は皮下免疫療法がメインで、アナフィラキシーショックなどの重篤な副作用の発現もあり、希釈したアレルゲンを皮下注射する投与方法も煩雑であり普及していませんでした。より安全で簡便な舌下免疫療法が普及すれば、今や国民病とも呼ばれる花粉症の患者さんにとって大きな救いとなりそうです。

学術は、下肢深部静脈血栓症に対するワーファリン厳格治療の効果について医師会病院循環器内科から報告していただきました。古くて安価なワーファリンですが、適正使用すれば、血栓退縮効果で直接経口抗凝固剤に劣ることがないことが示唆されています。

随筆・その他は、古庄弘典先生の医学切手コレクション、武元良整先生の「『胃痛』を訴える女性 - ビタミンB₁₂不足 -」に、連載が終了した「シリーズ医療事故調査とその周辺」の要約版と言えそうな新シリーズ「医療事故調査制度創設への途」を小田原良治先生からご寄稿いただきました。ありがとうございます。また、リレー随筆は、鹿児島大学の堀口達史先生の「アイドルマスター シンデレラガールズ」というソーシャルゲームに関する私の知らない世界のお話で、興味深く読みました。先生の推しアイドル「新田美波」がいつの日か総選挙で1位になれるといいですね。

今年は、県外でニキビ治療の講演をすることが多く、「ニキビは瘢痕が残ることもある病気です」と説明する際に、私学校址の銃弾痕の写真を出して「鹿児島では141年前の西南戦争の痕が今でも残っています」と紹介してきました。いよいよ「西郷どん」も最終回、今回の編集後記は「もう、こちらで良かるかい」。

（編集委員 島田 辰彦）